



[果樹部門]

[農業研究所ホームページへ](#)**13. 「ピオーネ」の着色向上にはS-ABA処理の時期を果粒軟化始期まで早めてもよい**

[要約]

「ピオーネ」の果粒軟化始期にS-ABA 1,000ppm液を果房散布処理すると、着色始期での処理と同等の着色向上効果が期待できる。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 果樹研究室

[連絡先] 電話 086-955-0276

[分類] 技術

[背景・ねらい]

「ピオーネ」では、着色始期に植物成長調整剤S-ABA（天然型アブシシン酸）液剤を果房に散布処理することにより、着色促進効果が認められている。S-ABA液剤を果房にむらなく散布するためには、無袋の果房への散布が推奨される。しかし、県内の簡易被覆栽培の「ピオーネ」においては、通常着色始期には病虫害予防等のため果房は既に被袋されており、S-ABAを処理するためには除袋するか、被袋時期を大幅に遅らせる必要がある。そこで、「ピオーネ」に対して着色始期よりも早い果粒軟化始期にS-ABA液剤の果房散布処理を行い、着色及びその他の果実品質に及ぼす影響を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 令和6年、7年ともに、果粒軟化始期にS-ABAを果房に散布すると、無処理の場合と比べて果皮色が明らかに優れた。着色始期に処理した場合と比べても、令和7年は同程度、令和6年はそれ以上に着色が向上した（図1、表2）。
2. 果粒軟化始期にS-ABAを果房に散布しても、果粒重及び酸含量に大きな影響はなく、糖度は無処理に比べてやや劣るものの19度以上であり、商品性に問題はない（表2）。
3. 果粒軟化始期にS-ABAを果房に散布すると、果面の汚れ及び果粉の溶脱が認められるものの、着色始期に処理した場合と比べて同程度であり、商品性に影響を及ぼす水準ではない（表2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 本剤（住友化学株式会社、商品名：アブサップ液剤）の使用時期は、「ピオーネ」及び「巨峰」に限り、果粒軟化始期から着色開始2週間後までである。その他の巨峰系4倍体品種については、着色始期から着色開始2週間後までである。
2. 本試験では、処理前に除袋し、蓄圧式噴霧器を用いてS-ABA 1,000ppm液を果房に満遍なく散布し、薬液が乾いた後に再び被袋した。果房当たりの散布量は、令和6年が10ml、令和7年が6mlとした。
3. 本試験における無核化・肥大処理は、満開期にジベレリン 25ppm＋フルメット 10ppm液で花穂浸漬処理を行った。
4. 本剤は、薬効に移行性がないため、散布に偏りを生じないように、果房全体に散布する。
5. S-ABA処理による着色促進のためには、適正な着果量及び果房重での栽培管理が前提となる。
6. 袋掛けを通常よりも遅らせる場合には、病虫害のリスクが高まるため、追加防除を行う。



[具体的データ]

表1 各年の果粒軟化始期及び着色始期におけるS-ABAの処理日

年次	S-ABAの処理日		処理日の差
	果粒軟化始期 ^z	着色始期 ^y	
令和6年	7月5日	7月13日	8日
令和7年	7月4日	7月11日	7日

^z果房中に軟化した粒が確認され始めた時期

^y果房中に着色が始まった粒が確認され始めた時期



図1 収穫時の果房の様子

(左：果粒軟化始期区、
中：着色始期区、右：無処理区)

表2 S-ABA処理の時期の違いが「ピオーネ」の果実品質に及ぼす影響

年次	処理区 ^z	果皮色 (C.C.)	果房重 (g)	果粒重 (g)	糖度 (° Brix)	酸含量 (g/100ml)	汚れ (程度 ^y)	溶脱 (程度 ^y)
令和6年	果粒軟化始期	6.5	635	19.5	19.3	0.50	1.5	2.5
	着色始期	6.1	625	19.3	19.7	0.49	1.3	2.5
	無処理	5.1	611	19.1	19.9	0.50	0.2	0.8
令和7年	果粒軟化始期	7.5	545	19.3	19.4	0.40	1.7	2.9
	着色始期	7.5	553	18.7	19.3	0.39	2.2	2.8
	無処理	6.5	523	16.9	20.2	0.46	0.1	0.9
分散分析								
処理	果粒軟化始期	6.8	605	19.4	19.3	0.47	1.6 A ^w	2.6 A
	着色始期	6.6	601	19.1	19.5	0.46 -	1.6 A	2.6 A
	無処理	5.6	582	18.4	20.0	0.49	0.1 B	0.8 B
年次	令和6年	5.9	624	19.3	19.6	0.50 -	1.0 -	1.9 -
	令和7年	7.2	540	18.3	19.6	0.42	1.3	2.2
処理		** ^x	ns	ns	**	-	-	-
年次		**	**	*	ns	-	-	-
交互作用(A×B)		ns	ns	ns	ns	-	-	-

^zいずれの年次においても、各処理時期にS-ABA1,000ppm液を果房に満遍なく散布

^y0:無、1:微、2:少、3:中、4:多、5:甚(4以上で商品性の低下がみられる)

^x果皮色、果房重、果粒重及び糖度は二元配置分散分析により、**は1%、*は5%水準で処理区間、年次間及び交互作用に有意差あり、nsは5%水準で有意差なし、-は未検定

^w果面の汚れ及び果粉の溶脱は、2年間のデータを用いて、Steel-Dwass法により処理区間のみ検定を行い、異英大文字間に1%水準で有意差あり

[その他]

研究課題名：県内ブドウ主要品種におけるS-ABA処理の適用性の検討

予算区分・研究期間：県単・令6～7年度

研究担当者：上田一輝、中島 譲、久保田朗晴、平井一史、白石陸人

関連情報等：1) 試験研究主要成果、[令3 \(29-30\)](#)、[令4 \(37-38\)](#)、[令6 \(35-36\)](#)